

(西暦) 2019年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

集中治療室における協働実践に関する現象学的研究

～看護師たちへの同行の記録から～

学位の種類: 修士 (看護学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 18894703

氏名: 風野 美樹

(指導教員名: 西村 ユミ 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

研究目的

救命救急センターは、緊急性・専門性の高い疾患に対応しており、多職種の協働で成り立っているとされる。しかし実際の現場では多職種の協働とその意義を実感できていない現状がある。そこで複数人の実践の中で、相互に了解、習慣化されているため自覚されていない事象や、当事者にとっての意味を日常の実践から明らかにすることで、複数人でも働くことの在り方を捉えなおせるのではないかと考えた。

本研究では、救命救急センター内の集中治療室において、看護師たちと医師などの医療者とが関わる実践の編成を、現象学的記述によって明らかにすることである。

研究方法

救命救急センターで 15 年以上の経験をもつ研究者が、集中治療室経験 2 年目以上の看護師への参加観察、及び非構造化面接を実施した。調査は看護師、医師などの医療者が共に関わる場面に注目した。研究参加者は看護師 16 名と、救急科 3 名、心臓血管外科 7 名の医師であった。「事象そのもの」に立ち帰ることを重視する現象学的研究を用い、看護師が患者や周辺の医療機器と関わる場面を中心に、はっきり意識されていない次元から、実践の文脈に注目して分析、記述した。

結果・考察

集中治療室の実践については、勤務開始前に集まる丸テーブルやパートナーシップとのやり取り、異なった専門職が関わる処置や心臓血管外科術直後の対応、また日勤と夜勤の引き継ぎ前後の集中治療室全体の医療者の動きについて記述した。その結果、複数人での協働実践は、言葉に出る／出ないやりとり、その場の役割や配置により行動が促されること、時間により場が作られていくというあり方で編成されていた。やりとりにおいて言葉に出す／出さないは、医療者が相手の実践経験などをどれだけ知っているのかが素地となり、意識せずとも選り取られていた。また、異なった職種の間関わる処置などでは、その場の役割や立ち位置から行為が促され、複数人で一つの行為を生み出していた。さらに、個人の看護師の動きは全体としての病棟の協働を作っており、個々の看護師たちが、勤務帯や患者の入室といった時間に注目しながら集中治療室全体の患者に関心を向けていることにより成り立っていた。

これらの協働実践は、集中治療室という場の状況やともに働く看護師や医師などの志向を漠然とであっても相互に了解する／されていることを基盤として成り立っていた。